

## 神の子イエスの「証人」たち

(ヨハネ五・三一〜四七)

戸籍関連の届出の中に証人を必要とするものが四つある。婚姻、離婚、養子縁組(普通)、養子離縁(普通)である。これらはみな身分の変動を伴う重要な届け出であり、かつ当事者の合意が何より重要という共通点がある。こういふと「じゃあ当事者の合意があれば良いのでは？」と考えがちであるが、それは早計というもの。これは身分の変更を伴う重要案件だ。届け出が真に両者の合意に基づくものであるかを立証するものが必要なのだ。他にも銀行の窓口などで「では大坂様、ご本人様であることの確認をいたします」と聞かれた際に「何言ってるの、決まってるじゃない。俺は俺だよ、分かるう」では通らない。免許証なり、保健証なり、マイナンバーカードなりで窓口に来た大坂太郎を名乗る中年男が確かに「その人」である証明が必要なのだ。今朝の箇所においてイエスはご自身の証言者を紹介している。

### 一・バプテスマのヨハネ

「もしわたしだけが自分のことを証言するのなら、私の証言は真実ではあ

りません」と言つたイエスがまず挙げたのはバプテスマのヨハネであった。確かにヨハネはこの福音書の始まりにおいて「神から遣わされ、光(イエス)について証しする者(一・六〜八)」と紹介されており、この箇所では「燃えて輝くともしび」と形容される。灯火は発光し、暗闇を照らす。だがその「光」はどこまで行っても暫定的。どんなに明るい松明も供給がなければ光を発し続けることはできない。バプテスマのヨハネも成程永遠の光であるイエスを証する偉大な存在ではあつたが、彼はやはり人間であり、その意味では燃えて輝く松明に過ぎなかつた。またイエスがこのことを人々に訴えたのはバプテスマのヨハネという人間によつて自らが神の子であることを担保するためではなく、そのことによつて人々が救われるためであつた。

### 二・聖書

三九節においてイエスはユダヤ人たちに對し大胆にも「聖書はわたしについて証言している」と語り、四七節には「モーセが書いたのはわたしのことだ」と断言している。私たちがよく知るようにユダヤ人たちは聖書(旧約)を読まない人では決してなかつた。それはイエスも「あなたがたは、調べています」と言つて認めている。だが彼らの聖書研究に

は致命的な欠陥があつた。それは彼らの研究成果が「イエスはメシア、救い主である」ということに至らなかつたからである。むしろ彼らはその研究の成果によつて自らを誇らせ本来神に帰されるべき榮譽を自分たちのものとし、互いの間にあるべき神の愛を喪失したのだ。そのような状況の中でイエスは旧約聖書全体がメシアである自らを証言するものであることを示されたのだ。

### 三・父なる神

ではイエスが神の子であることのもう一つの証はどこにあるのだろうか。三六節にある「父がわたしに成し遂げさせようとしてお与えになつたわざ、即ちわたしが行つてゐるわざそのもの」がそれである。一寸冗長にも思える表現であるが、ここには大切な真理が隠されている。ヨハネ五章においてイエスは一貫して自らの成したわざは即ち神のわざであることを主張しているのだが、もしそうであればイエス自らのわざは即ち神のわざであり、イエスのわざは父なる神によつて裏書されているということになる。バプテスマのヨハネにせよ、聖書にせよ、よしそれらの背後に神が働かれていますことを認めたとしても、畢竟それは人の所産である。だからこそイエスはそれらのものからのお墨付きを拒むようなことも言つている(三四、四一節)。しか

し自分の行つてゐるわざについてはそのような留保はない。御父の命を受けて世に下り、世を歩まれた御子イエスの人格と行動、即ち御子の自己啓示こそ、イエスが神の子であることの最大の証明なのである。父なる神がそのことの証人(?)となつてゐるからである。

\* \* \*

「、、、これから後もいろいろ信仰上、また神についての迷ひ、迷ひが生じます、いつもつまりは『イエスほどの純潔な、崇高な無我愛に生きた、はかるべからざる智慧の持ち主が、嘘を言うはずはない。もしあれが嘘ならこの世のほかのことすべてはもつと嘘にちがいない、、、とにかく世に信ずべきものありとせば、彼イエスの言葉と行いである』こう考えて再び努力精進の勇気を奮い起こします。私にとつては今まで読んだ何百千の書物よりも、このイエスという人の一言が重いのです。」この手紙を書いたのは早世の詩人、八木重吉である。当時の多くの文学者がそうであつたように彼もまた聖書を愛した。しかし重吉の読みほどヨハネ福音書のメッセージに合致してゐるものはないと思う。友よ、聖書を読むならば、重吉のように読んでみようじゃないか。理屈ではなく、その中にあるキリストの真実に触れ、心燃やされて生きようではないか。